

平成一七―一九年度科学研究費補助金 基盤研究C研究成果報告書

足利義満期の室町幕府將軍権力における政治・文化の相互補完的關係の研究

(研究課題番号 一七五二〇一三八)

研究代表者

小川 剛生

(国文学研究資料館文学資源研究系准教授)

平成二〇年三月

目次

実績報告 1

第一部 論文篇

花の時代の演出家たち 松岡 心平 4

将軍と和歌―足利義満の場合 小川 剛生 7

南北朝の政治と文化―二条良基と足利義満の和漢聯句 小川 剛生 9

寵臣から見た足利義満―飛鳥井雅縁『鹿苑院殿をいためる辞』をめぐって 小川 剛生 17

第二部 資料篇

迎陽記諸本の研究 31 24

迎陽記(康暦元年(応永八年)翻刻) 31 24

康暦元年 31 康暦二年 43 応永五年 50

応永六年 58 応永八年 65

第三部 資料篇

足利義満年譜(稿) 75

はじめに 室町幕府の三代将軍足利義満は、日本の歴史上珍しい絶対的な権力者であった。高度な政治的なセンスに支えられた交渉術で巧みに守護大名たちの勢力を削ぐ一方、朝廷にあつては摂関以下の廷臣を手なずけて家臣とし、太政大臣に昇りつめた。公武政権を統一した義満の権力の源泉が何であるか、これまで様々に考察されてきたが、その完璧さに対し、いまだ十分な説明は得られていない。

ところで義満は、世阿弥を見出した一事をとつても明らかのように、文化に対する感性が抜群であり、かつそれを政治に利用するのに長けていた事実がある。王朝文化の教養を十分に身につけたことで、それまでの将軍には不可能であった朝廷への進出を果たした。各地へ派手な遊覧を繰り返したのは、地方の大名への威嚇を兼ねていた。義満の権力を荘厳するものとして、同時代の文化のありようを考える。

○足利義満ら室町幕府将軍の、公・武・禅の領域にわたる文化的素養の深さ。
○将軍の、同時代の文学・学問・芸能・美術等に対し指導力を発揮した具体的事例とその影響。

○室町幕府の将軍権力が、文化現象によって、どのように荘厳され、成熟していったか。

といった点を探り、政治史・文化史を融合した形で、室町時代の把握を試みる。

将軍権力の実質について、同時代文化に対する指導力を重視し、その執政と互いに補完しあうものとした視点は珍しいであろう。歴史学者の将軍権力論は、あくまで封建制に基づく武家政権の首長として評価したもので、権力維持のための重要な装置であった文化現象は閑却されている。近年話題となった、今谷明『室町の王権』（平成二年）も、朝廷（後円融天皇）と幕府（義満）との間に繰り広げられた権力争いの延長線上として、王位簒奪説を唱えたものである。成人後の義満は完全に公家であつて、公家が保持してきた王朝文化の最大の庇護者となり、これを古典として再生させる役割を担った。そのことに着目してこそ、義満の権力の実質、その治世の方向性も明らかになろう。また、この時代の文化現象はそのまま将軍権力の表象とも言える。たとえば文学作品でも、和歌（将軍の命による勅撰集、将軍主催の歌会・歌合）・漢文学（五山僧による将軍讚美の詩文）・軍記（将軍と守護大名との戦争の記録）・紀行文（将軍の遊覧への随行記）などが挙げられるが、こうした作品はさして研究が進んでおらず、本研究において初めて具体的な考察が加えられることになる。個別の文化的業績に対する研究成果に基づき、新たな将軍権力論が構成されると考えられる。

足利義満の伝記は数多いが、その基礎となるデータは、臼井信義の人物叢書（昭

和三五年）の域を実は出しておらず、補訂する必要がある。なお、近年ようやく政治史偏重の歴史記述への反省が見られ、権力と文化との相互関係を重視する動きが高まっている。文学史では、足利将軍の『源氏物語』『平家物語』への傾倒に注目し、その王権を荘厳する物語として利用したとする考えもあるが、義満の側でそれを欲した事情は必ずしも明らかではない。その文化的業績を確かな資料に基づいて分析することが求められる。一方、近年、音楽・絵画など中世芸術の諸分野において、義満の存在は注目されつつある。本研究は、こうした最近の研究動向と連動しつつ、総合的に義満の業績を収集し、位置づけるものである。

研究組織

研究代表者 小川 剛生（国文学研究資料館・文学資源研究系・准教授） 義満期の公家日記の研究、伝記資料の収集、研究の統括。
研究分担者 松岡 心平（東京大学大学院・総合文化研究科・教授） 室町期の文学・芸能関係資料の研究。共同研究の主催。

研究経費

平成一七年度：一五〇〇〇〇〇円
平成一八年度：七〇〇〇〇〇円
平成一九年度：一三〇〇〇〇〇円（直接経費：一〇〇〇〇〇〇円、間接経費：三〇〇〇〇〇円）

研究経過

□平成一七年度

①『迎陽記』のテキスト・データ化と公刊準備（小川）

義満の時代の基礎史料である『迎陽記』について、京都大学附属図書館・宮内庁書陵部に赴いて調査を行い、紙焼写真二〇〇枚弱を購入した。また、お茶の水図書館蔵成篋堂文庫の東坊城家旧蔵本の写本も調査を終えた。ついで、記事が現存する康暦元・二、応永五・六・八の五年分の記事のテキスト・データ化に着手し、予定通り、二〇万字（含傍注）の翻刻を完成することができた。

②義満の政治的行動についての研究（小川）

まず義満の和歌についての研究を行った。ついで、その歌道師範であり、側近でもあつた飛鳥井雅縁を取り上げた。そこで天理図書館より飛鳥井家旧蔵『古今問答』

ほかの歌書の写真を購入し、雅縁自筆であることを明らかにした。その紙背文書は当時の要人の書状であり、義満の時代の生々しい証言となるものである。没後まもない義満が「尊号御事」と称されていた新事実も判明した。

③室町將軍と學問・芸能との関係についての研究(松岡・小川)

財団法人観世文庫に於いて、室町から江戸にかけての演能に関する史料について、数度の共同調査・研究を行い、その成果の一部を『国文学』(学燈社)誌上に公表した。続いて、没後六百年を記念して、『ZEMMI』誌で足利義満特集を組むことを決定し、一月二五日に森話社で打合せを行った。その場で、一八年一月二月に刊行すること、松岡・小川のほか、日本史・日本文学の研究者六名に、義満ないし室町幕府將軍の文化政策、外交・経済・禅宗・建築・學問・歌道といったジャンルでの論文執筆を依頼することなどが決定した。依頼した全員からは執筆の快諾を得た。本年度の研究は、この特集の編纂を軸として展開する予定である。

□平成一八年度

①義満時代の基本史料刊行のための準備(小川)

前年度に引き続き『迎陽記』を対象とし、本年度は改元記を中心に本文を整理した。京都大学附属図書館・宮内庁書陵部・筑波大学附属図書館・国立公文書館内閣文庫に写本調査に赴き、紙焼写真を購入し、翻刻を進めた。康安から応永まで九度にわたる改元の記をほぼ入力し終えた。足利義満の政治的意向が年号にそのまま影響したことが、当代の漢籍受容に関しても重要な知見を得られた。

②義満の政治行動(儀式・遊覧・戦争・造営)についての記録・書物の研究(小川)

前年度と同様の研究を続けた。義満の側近であった飛鳥井雅縁を取り上げ、論文「龍臣から見た足利義満」を執筆し、下記『ZEMMI』第4号に掲載した。この過程で、雅縁の義満を追悼した仮名日記『鹿苑院殿をいためる辞』の、最古写本を発見することができた。

③室町時代前期における仙洞・將軍家関係の芸能活動についての研究(松岡)

前年度と同様の作業を続け、講演・論文として公表した。室町將軍の意図した都市計画として、「花の都」をキーワードとして研究し、論文を下記『ZEMMI』第4号に掲載した。また世阿弥の芸術論書を文化史的視点から再読することにも努めた。

④雑誌『ZEMMI』足利義満特集号の編纂と刊行(松岡・小川)

まず八月四日に「足利義満の文化戦略」と題して櫻井英治・高岸輝・松岡・小川による座談会を行った。十二月二日には相国寺管長有馬頼底和尚に松岡・小川でインタビューを行った。さらに松岡・小川のほか、日本史・日本文学・宗教学研究者六名から室町幕府將軍の文化政策に関する論文を寄稿いただいた。

以上を松岡心平・小川剛生編『ZEMMI』第4号に「足利義満の時代」と題して一九年六月に森話社より刊行された。反響は大きく、初版一〇〇〇部はまもなく品切れとなり、八月に急遽八〇〇部を増刷することとなった。

□平成一九年度

①足利義満年譜(稿)の編纂(小川)

本研究のまとめとして、義満の事蹟を細大漏らさない年譜を編纂した。項目は二千以上に及んだ。公家日記の記事を精読することで、政治・文化的業績とその意味を明らかにすることに努めた。そこで『迎陽記』とともに、吉田兼照・兼敦父子の日記『吉田家日記』が極めて重要な史料となった。自筆本が天理図書館に蔵されており、本文批判の要は少ないが、これまで紹介されていない記事が多く、義満の伝記研究に寄与する面が多であった。また禅僧の語録文集にも重要な史料を見出すべく、『五山文学新集』など史料集刊本も購入した。

②義満文化圏の構成と活動についての研究(小川)

義満のもとでは公家・武家・禅僧の一同に会する雅会がしばしば開催されたが、その紐帯となつたのは和漢聯句であった。この頃から作品も残存するようになる。そこで至徳三年(一三八六)張行と推定される和漢聯句百韻を取り上げ、七月二日、「南北朝の政治と文化―一条良基と足利義満の和漢聯句」と題して国文学研究資料館にて講演し、一月、これを冊子にまとめた。精細に読み解くことで、和漢聯句を当代の学問史・文化史の史料としても大いに活用することができた。

③室町時代前期における仙洞・將軍家関係の芸能活動についての研究(松岡)

前年度と同様の作業を続け、とりわけ観世文庫の調査を通じて新たに得た知見を基にして、世阿弥の芸術論書に新たな文化史的視点を取り入れた分析を試みた。

④報告書の編纂(小川)

以上の研究成果の一部は、既に雑誌『ZEMMI』第4号に収録、刊行されているが、三年間の成果を踏まえて報告書をまとめた。すなわち論文編、迎陽記の諸本研究と日記翻刻、足利義満年譜(稿)の三部構成である。但し紙数の関係上、収録は研究成果のごく一部にとどまる。なお、小川が没後六〇〇年を記念して中公新書『足利義満』の執筆を依頼された。研究成果を広く一般に伝えるため、今年度からその執筆を開始した。

研究業績 ※●は本報告書に収録

○小林康夫・松岡心平 対談「世阿弥の身と心と体―存在と時間」『国文学解釈と教材の研究』第50巻7号(特集「歴史と身体」)平成17年7月、6〜25頁。

- 小川剛生 観世文庫解題 江戸前期―演能の記録を中心に 『国文学解釈と教材の研究』第50巻7号(特集:能―歴史と身体) 平成17年7月、86～95頁。
- 小川剛生 足利義満の和歌 『和歌をひらく第1巻 和歌の力』岩波書店、平成17年10月、98～99頁。
- 小川剛生 良基と世阿弥―『良基消息詞』偽作説をめぐって 『Z E A M I』第3号(特集:生誕六百年記念 金春禪竹の世界) 平成17年10月、186～203頁。
- 小川剛生 『二条良基研究』笠間書院、平成17年11月、総672頁。
- 松岡心平 源氏物語を読む 金春禪竹 『Z E A M I』第3号(特集:生誕六百年記念 金春禪竹の世界) 平成17年10月、89～102頁。
- 中沢新一・松岡心平 対談 金春禪竹と中世文化の深層 『Z E A M I』第3号(特集:生誕六百年記念 金春禪竹の世界) 平成17年10月、26～53頁。
- 松岡心平 能における安土桃山―『也足詞書和歌』にみえる古津宗印 『国文学解釈と教材の研究』第51巻11号、平成18年11月、39～47頁。
- 松岡心平 芸能の身体の改革者としての世阿弥 中世文学会編 『中世文学研究は日本文化を解明できるか』笠間書院、平成18年11月、50～62頁。
- 小川剛生 乱世の宮廷と歌人たち―南朝を中心に 国立歴史民俗博物館編 『和歌と貴族の世界』塙書房、平成19年3月、43～63頁。
- 有馬頼底・松岡心平・小川剛生 「インタビュー」相国寺を創った将軍―足利義満六百年忌によせて 『Z E A M I』第4号(特集:足利義満の時代―六百年忌記念)、平成19年6月、10～29頁。
- 桜井英治・高岸輝・松岡心平・小川剛生 座談会 足利義満の文化戦略 『Z E A M I』第4号(特集:足利義満の時代―六百年忌記念)、平成19年6月、38～67頁。
- 松岡心平 花の時代の演出家たち 『Z E A M I』第4号(特集:足利義満の時代―六百年忌記念)、平成19年6月、30～37頁。
- 小川剛生 寵臣から見た足利義満―飛鳥井雅縁『鹿苑院殿をいためる辞』をめぐって― 『Z E A M I』第4号(特集:足利義満の時代―六百年忌記念)、平成19年6月、155～171頁。
- 南北朝の政治と文化―二条良基と足利義満の和漢聯句 総合研究大学大学院文化科学研究科教育研究プロジェクト特別講義第11号 平成19年11月 1～34頁。
- 小川剛生 禁裏本・禁裏文庫について―高松宮(有栖川宮)本を中心に 『語文』第129輯(日本大学国文学会) 平成19年12月、3～15頁。